

はんにやしんぎょう
『般若心経』について (十一)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

IV. 『般若心経』と弘法大師空海 (1)

1. 「波羅蜜多のやりかた」と「真言のやりかた」

今回と次回は、真言宗の開祖である弘法大師空海の『般若心経』解釈を中心に取上げます。このシリーズの第三回目にも簡単に触れたことがあります。弘法大師は『般若心経』を密教経典と理解する独自の解釈を、その著作において展開しています。

『般若心経』に対しては、インドにおいても中国においても日本でも、数多くの注釈書が作られています。それらはいずれも、『般若心経』を膨大な組織を持つ般若経典の一つとして理解し、そのエッセンス (心髄) を説いたもの、と解釈しています。般若経典と総称される経典グループは、西暦紀元前後の大乗仏教勃興期に端緒を發し、大乗仏教の展開とともに発展を遂げ、ついには玄奘三蔵によって漢訳される『大般若経』六百巻という膨大な分量を持つ経典に至ります。その基本テーマは「空」の思想です。「般若」とは「一切皆空」を完全に理解する、ブッダの智慧に他ならないのです。言葉を換えれば、般若経典とは「空」の思想をどのように人々に伝えるか、という一連の試みであるとも言えます。

10世紀末から11世紀前半に活躍した、インド密教の学匠の一人であるアドヴァヤヴァジュラは、『^{しんじつほうまん}真実宝鬘 (Tattvaratnāvalī)』という著作において、インド仏教の分類を行っています。それによると、インド仏教は大きく「^{しょうもんじょう}声聞乗」・「^{どっかくじょう}独覚乗」・「大乘」の三つの「乗」、つまり「乗り物=実践手段」に分かれます。「声聞」とは元来はお釈迦さまの直弟子を表しますが、ここでは「古い教えにしがみついている人たち」というほどの意味です。「独覚」とは「^{えんがく}縁覚」とも言いますが、「独りで悟って、他の人に悟りの内容を伝えない人たち」を意味します。この二つの立場は、すべての人々を悟りへと導く教えである「大乘 (大きな乗り物)」に対して、「小乗」と呼ばれる場合もあります。極端な言い方をすると、声聞=「ガチガチの石頭」、独覚=「ドけち」というような悪口です。

アドヴァヤヴァジュラの区分によれば、大乘はさらに、「^{りしゅ}波羅蜜多のやりかた (波羅蜜多理趣 *pāramitānaya*)」と「^{まんげん}真言のやりかた (真言理趣 *mantranaya*)」に分かれます。

「理趣 (*naya*)」とは、「導く手段」「方法」というような意味です。大乘を実践するのに、方法論として「^{げんぎょう}波羅蜜多」と「^{まんげん}真言」の二通りある、というわけです。これは真言宗などで言う「^{とうけ}頭教」と「^{みつ}密教」に相当します。般若経典は当然、「波羅蜜多のやりかた」を代表する経典です。「波羅蜜多」とは「完成」を意味しますが、大乘仏教では六あるいは十の波羅蜜多を菩薩 (悟りをもとめる人) の実践項目として立てます。六波羅蜜多とは、「^{じかい}布施・^{にんにく}持戒・^{しょうじん}忍辱・^{ぜんじょう}精進・^{ぜんじょう}禪定・^{ちゐ}智慧」の6つ、十波羅蜜多は六波羅蜜多に「^{がん}方便・^{りき}願・^{ちから}力・^{ちゐ}智」の四波羅蜜多を加えたものをいいます。そしてこれらの六あるいは十の波羅蜜多の実践は、究極的には「般若波羅蜜多」すなわち「智慧の完成」を根底に置き、それを目標として行われるものでなければなりません。代表的な般若経典である『^{はっせんじゅ}八千頌般若経』には、「知恵の完成は (他の) 五つの完成に先立つものであり、その案内者であり、指導者である。〈中略〉五つの完成は知恵の完成のなかに含まれている」と説かれています (梶山雄一訳『大乘仏典2 八千頌般若経 I』中央公論社,1980,p.114)。一方「真言」とは、文字通りには「^{しんじつ}真実の言葉」ですが、ここでは特に、ほとけの教えの精髓を短い音節に凝縮した語句であり、またほとけそのものを単音節で表す、象徴言語と言えます。

それでは「波羅蜜多」と「真言」では、何がどう違うのでしょうか。「波羅蜜多」の根底にあるのは「般若波羅蜜多」すなわち「智慧の完成」です。これは「一切空」の真理を正しく完全に理解することです。それを根底に置き、他の人が悟りに到達するための手助けとなる「利他行」、すなわち他者への積極的なはたらきかけを行わねばなりません。これは自分自身の修行の完成よりも、他の人の悟りを優先する慈悲の実践です。本来の大乗仏教の立場は、智慧の完成と慈悲の修行を、永遠の輪廻の中で途方もない時間を掛けて繰り返し実践していくことによって、誰でもが悟りに到達可能である、というものでした。

これに対して、真言という象徴言語や、手の指によるポーズという象徴動作などを用いることによって、悟りに到達する時間を現在の生存期間中まで一挙に縮めたのが「真言のやりかた」すなわち「密教」でした。悟りに必要な膨大な時間にわたる智慧と慈悲の実践を「真言」すなわち「真実の凝縮された言葉」を唱える、などの象徴に置き換えたのです。

しかしながら弘法大師空海の立場は、このようなインド密教の考え方は少し異なっているように思えます。弘法大師の基本的な考え方は、慈悲方便の行を実践して悟りに近づいていく、という大乗仏教の伝統的なスタイルではなく、密教の実修、すなわち「真言のやり方」によってまずブッダになり、そのうえで慈悲方便の行、つまり「波羅蜜多のやり方」を実践する、というものであったと推測されます。弘法大師は他者への慈悲の実践を自らの不可欠の課題としていました。そのことは、我が国初の庶民教育機関である「綜藝種智院」の創設や、讃岐の国の満濃池の修築工事の完成などの様々な社会活動として如実に現れています。また「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん」という、有名な『高野山万燈会の願文』にも明らかです。このような弘法大師の生き方、宗教実践のあり方が、各地の「弘法井戸」のような様々な大師伝説、あるいは今日でもなお盛んな四国八十八カ所遍路のような、弘法大師に対する広範な信仰に結びついているのでしょう。

ところで『般若心経』では、上に記した「波羅蜜多」と「真言」の双方が説かれていることにお気づきとします。「是大神咒、是大明咒、是无上咒、是无等等咒」というときの「咒」の原語は、「真言」と同じくmantraです。般若波羅蜜多（智慧の完成）に集約される波羅蜜多の実践と、真理を凝縮した象徴原語である真言。これらは大乗仏教における二通りの実践のあり方として、顕教と密教とを区別するものでした。その二つが『般若心経』においては、どのように結びついているのでしょうか。このあたりに、『般若心経』を密教経典とみなす弘法大師の独自の解釈が現れてくる根拠がありそうに思えます。

2. 弘法大師空海著『般若心経秘鍵』について（1）

弘法大師の主著の一つに『般若心経秘鍵』があります。「般若心経を理解するための秘密の鍵」というような意味です。冒頭の、伝統的に「大綱序」と言われている部分には、

それ、仏法遙かにあらず、心中にしてすなわち近し。真如、外にあらず。身を捨てていづくんか求めん。迷悟我にあれば、発心すれば即ち到る。（頼富本宏訳注『般若心経秘鍵』宮坂有勝監修『空海コレクション』ちくま学芸文庫、2004、p. 319、一部改変）

という有名なことばがあります。「仏の教えは遙か遠いところにあるのではなく、自分の心の中、すぐ近くにある。真理は自分の外にあるのではないから、自分の身を離れて、どこに見つけられるであろう。迷いも悟りも自分自身の内にあるのだから、悟りを求める心を発すということが、すなわち悟りに到達する、ということなのである」、との意味です。